

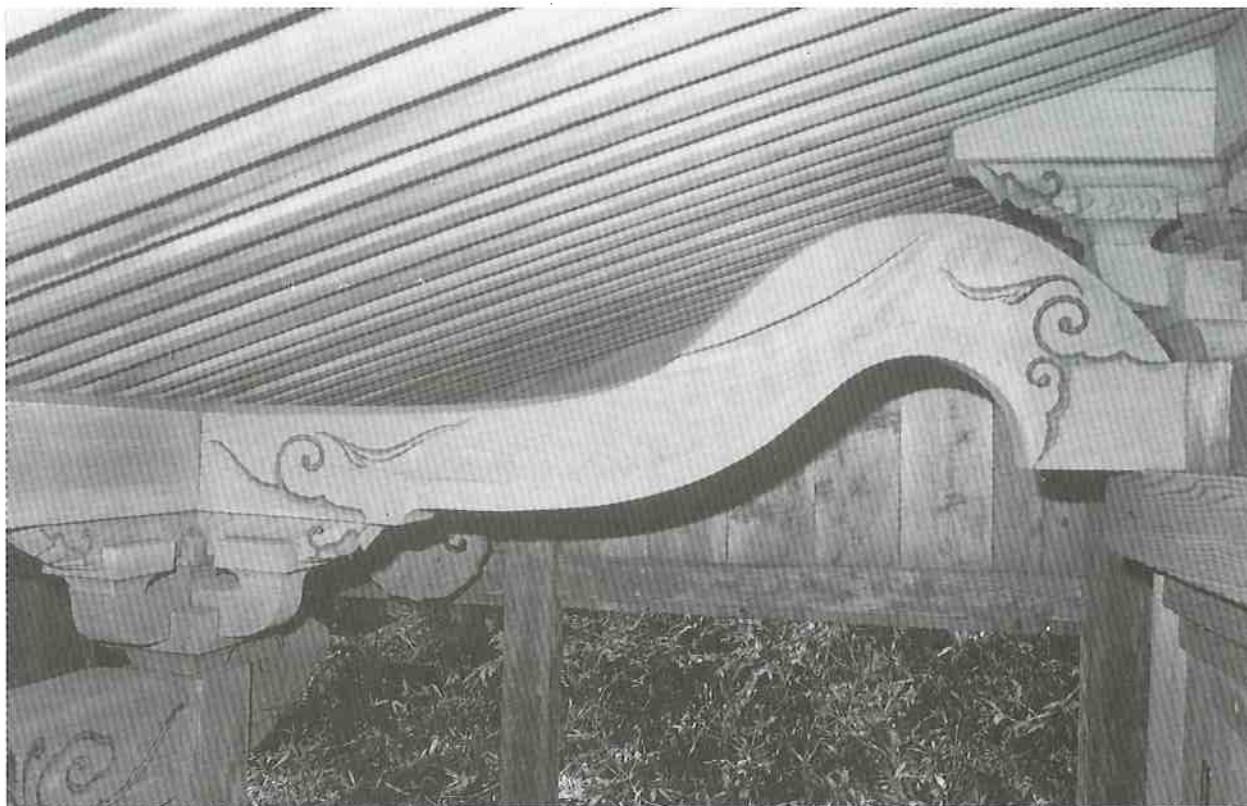
# かも 市史だより

平成13年3月

No.3

編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

## 加茂市の社寺建築調査



▲日吉神社本殿 洗練された曲線を持つ海老虹梁



▲嶽山寺観音堂



▲日吉神社本殿の妻面

私は文化財部会で建造物を担当しています。新潟県発行の「宗教法人名簿」によると、市内で八十五件の法人があり、ます。その他に創立・沿革を記した資料も私の手元にありますが、建造物そのものの資料は無いに等しいのです。よって私は建物全数の現地確認を行ない、その中で建立年代、様式、構造、保存度等の観点より詳細な調査対象とすべき建造物を選び出す作業をすることとしました。その作業は現在も続行中で約半数の四十分は調査済みです。

その中で気付いたことは、予想外に古い年代（江戸初期に近い）や高い意匠性をもつ建造物が多いことです。下高柳地区にある日吉神社の建造物群、特に本殿は集落の産土神としてのレベルをはるかに越えた高い洗練さを持ち、かつその意匠は骨太な部材と古風な絵様とあわせて多分に中世的な雰囲気を持っています。ちなみに本殿には、寛延二年（二七四九）と記載されている上棟札もあり貴重です。その他、宮寄上地区にある嶽山寺の観音堂は荒々しい意匠ながら十七世紀の建造を思わせるものです。今後の調査が楽しみです。

（文化財部会 山崎完二）



# 近世初期の北潟村の開発

須田地区の北潟村の開発の足跡を示す新資料が発見され、近世の村の姿を解明する作業が進んでいます。



▲小林家文書

現在進めている加茂市史編さん事業では、旧『加茂市史』で拾いあげることのできなかった新しい史料をできるだけ見いだすことに努めています。近世部会では昨春秋に現在佐渡郡相川町に住んでおられる旧北潟村名家の小林誠悟氏所蔵文書の調査・採集を行なっていました。加茂地区にはめずらしい近世初、前期の文書が比較的まとまって残されており、今後さまざまな角度から検討されていくものと期待されています。

北潟村は、近世期を通じて新発田藩領でした。信濃川の左岸の自然堤防上に立地し、南は後須田、東は古川新田(白根市)と接する位置にあります。「小林家家譜」によれば、小林家の元祖を弥五郎(廣重)といいますが、須田大炊助に仕えた侍でしたが、上杉時代の永禄七年(一五六四)に荒地二十町歩の開発許可を得て帰農、従者の五十嵐兵右衛門・五十嵐与四右衛門・高橋仙助・織原傳右衛門・鎌田兵助・勝本伊之助・山口安右衛門の七家とともに村を切り開いたと伝えています。小林家を中心としたこれら八家が北潟村の草分け(初期本百姓・本家)と

考えられます。小林家文書の最も古い元和元年(一六二五)の文書には「上北方村」とあり、初期にはそのような呼称で呼ばれた時もあったとみられます。

北潟村の開発が進むのは寛永年間からです。元和七年(一六二二)の年貢が十二石余だったものが寛永元年(一六二四)には倍増して二十二石となり、同五年にさらに四十二石余となります。この頃戸数は二十数軒に膨れあがります。

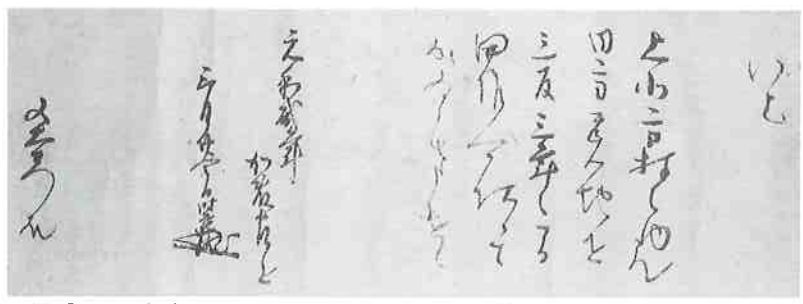
茨曾根村(白根市)と、ついで慶安三年(一六五〇)後須田村と争いながら開発を進め、承応元年(一六五二)検地で寛永年間の七町一反余の田は十五町五反余に増えています。野地をめぐる訴訟はこのうち寛文四年(一六六四)真木新田(白根市)、同十一年に古川新田とも起こしていきま

つづく寛永末期から慶安期にかけても大規模な開発が行なわれます。特に寛永二十年(一六四三)と翌正保元年には藩の足輕衆がやってきて開発した「御長柄開田」が北潟から後須田にかけて四町八反余も開かれます。「長柄開き」の年貢米は、足輕衆の給与に供されるのですが、この後、承応元年(一六五二)にも五町歩の長柄開田が行なわれています。北潟村の新田開発はこの藩の足輕衆による開発を特徴としています。こうして正保三年(一六四六)に領内一斉に作成された「御領内本田高付帳」通り村高百三十三石六斗余の村として確定します。

開発には、隣村との境界を決める必要があります。北潟村は正保二年(一六四五)に

「御判田」とよばれる藩の家臣の手作り田が設定されたことです。承応元年(一六五二)「北潟村指出し」によれば堀主馬助・泉徳左衛門・小川小伝次の合計一町三分が確認され、このうち泉・小川家のものは延宝八年までに絶家で消滅しますが、堀家の御判田(七反余)は幕末まで継続します。そして、これらの管理は肝煎の小林家が当り、それぞれの藩士に村の年貢とは別に納入しています。小林家文書には「御判田」分の年貢徴収をめぐるその知行主の取次人からの手紙がかなり残っており、今後の研究が求められています。

このように近世の村の姿を知らせてくれる小林家文書は大変貴重な資料です。(近世部会 佐藤賢次)



▲「元和二年上北方村新田開発免状」3反の開発地を3年間年貢免除するという鎌下年季を申し渡したもの



▶「北方村免定之事」寛永元年、藩が北方村の年貢定納高を二十二石と定めた郡奉行家の通達



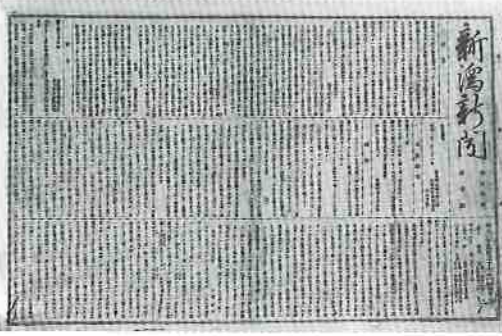


# 古新聞やーい!!

## 近現代部会の調査から

虫メガネ片手に鉛筆を走らせる。

昆虫や植物のスケッチの話ではありません。全部で十名の委員が毎月三日間程度、新潟市女池にある新潟県立文書館の一室で、こんな姿をさらしながら調査に励んでいるのです。そして視線の先には、細かな字でギッシリと紙面が埋められた「新潟新聞」があります。



「新潟新聞」創刊号の巻頭頁。県内の名望家や有力者のほか、後年「憲政の神様」といわれるようになる尾崎行雄も、福沢諭吉の推薦で一時編集に参画していた。

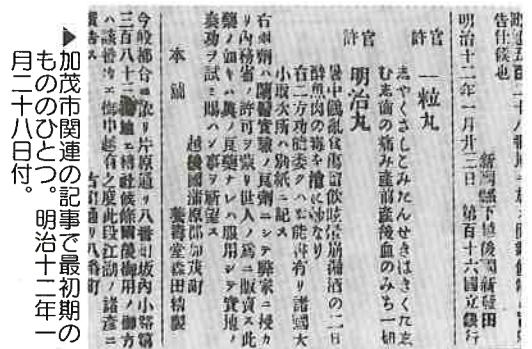
明治十年四月、県内で最初の本格的な日刊紙「新潟新聞」が創刊されました。現在、創刊時からのまとまった形では唯一東京大学に残されているだけという貴重な資料です。

県立文書館はマイクロフィルム化されたものを購入・印刷して閲覧に供していますが、この「新潟新聞」に掲載されている加茂市に関する記事を一昨年からは近現代部会と市内在住の委員が中心になって調査しています。

これまで近現代部会では戦前戦後の世相を探る様々な資料の調査収集に励んできました。ですがその一方で、資料が集まり史実の一端に近づけば近づくほど、散逸してしまった幾多の歴史的資料が惜しまれてならないのです。

今となつては二度と戻ることのないこうした資料を正確に補えるものなどもちろんありませんが、幅の広い対象を扱う日刊新聞という性質上、「新潟新聞」は往時の様子を伝えてくれます。

多くの委員は既にこうした作業を経験済みでしたが、未



加茂市関連の記事で最初期のものひとつ。明治十二年一月二十八日付。

### 部会長会議の風景

加茂市史編集委員会では日頃の調査活動のほか、折に触れ調査の進捗状況の相互報告と円滑な事業の伸展を期して会議を開いています。昨年暮れには各部会の責任者が集まり、第四回の部会長会議が開かれました。

これまでに多くの研究を重ね、さらに幾多の事業に参画した経験を持つ各委員は字句の表記方法や本の体裁ひとつとっても一言一語、会議は和やかな中にもどこまで譲れないところから先は譲れないとい

### 古い文書や写真はありますか

市史の編さんには、一にも二にも古い時代の資料が欠かせません。和紙に書かれたような古い文書はありませんか。墨で字の書かれた木片などがご自宅に残されていませんか。文字資料だけではありません。昔の集落の姿が描かれた地図や図面類がどこかに保存されていないでしょうか。また、アルバムの片隅に、人や風景が今とはまるで違った様子で写された古い写真などがあつたら拝見させていただきませ



▲昨年12月に行われた会議の様子。昼下がりに始められたが、外はもう日が暮れようとしている。

### 編集後記

市史編さん事業も発足から丸二年が経ちました。この間市内外の多くのみなさまから資料や情報の提供を受けました。ほんとうにありがとうございます。調査はまだまだ続きます。今後ともみなさまの一層のご協力をお願いいたします。